

白雲片片

第二十六回

大智禅師の行跡

九月十一日、当会主催の「聖護寺さま拝登参禅」に参加し、熊本菊池市に行つて参りました。聖護寺は鳳儀山と号し、約七百年前の南北朝時代、大智禅師によつて開創されました。開基は肥後国（熊本県）を治めていた菊池武重です。実は以前から自坊に『大智禅師偈頌』と題した漢文形式の和本があり、これを拝読しながら大智禅師の鴻業の一端を記し、微力ながらその慈恩に報いたいと思います。

大智禅師は正応三年（一二九〇年）、肥後国宇土郡長崎村（熊本県宇城市）にて生誕、幼少の頃に同じ肥後国の大慈寺で禅風を奮っていた寒巖義尹禅師に就いて剃髪得度されています。義尹禅

師は京都深草の興聖寺時代から永平道元禅師に参禅された初期曹洞宗教団の古参であり、道元禅師遷化後には永平寺二世孤雲懐奘禅師より嗣法され、二度も宋（中国王朝）に渡っておられます。

大慈寺では五年間修行されましたが、正安二年（一三〇〇年）に義尹禅師が遷化され、その後は義尹禅師の伝戒（仏祖正伝菩薩戒作法の伝授）の弟子である釋運西堂に就いて指導を受けられます。釋運西堂は後に京都八坂の臨濟宗法観寺の住持となり、この時に大智禅師も共に京都へ行かれています。徳治二年（一三〇七年）、十八歳の時に加賀国石川郡（石川県金沢市）の大乗寺におられた瑩山紹瑾禅師の門を叩いて師弟関係となります。瑩山禅師はお長元年（一二三一年）に明峰素哲禅師を後継者に指名して住持職を退かれましたが、大智禅師はその前後六年間、大乗寺にて修行されました。

正和三年（一二三四年）二十五歳の時、瑩山禅師の許可を得て元（中国王朝）へ渡航されます。その間の消息は詳しく伝えられていませんが、五山十刹、名僧知識を歴参され、十一年後の正中

二年（一三二五年）に帰朝されました。『大智禪師偈頌』の序文には「中華闊しと雖も、一個も嗣法とすべきの漢なし」との帰国の際の言葉が残されており、長い遍参の後、瑩山禪師への尊崇の念を益々大きくされたことと思われれます。大智禪師が帰朝後に能登国賀嶋郡（石川県羽咋市）永光寺におられた瑩山禪師の元に戻った様子が『洞谷記』正中二年の項に記されています。

『同五月廿日、鎮西の智侍者、遠く風を訪い來たる。曹山重編、五位君臣二冊、投子青語一冊、真歇了語一冊、將來して云く（以下略）。』

これに依ると正中二年五月二十日に瑩山禪師の元に戻り、元国より將來した様々な祖録を進上されたようです。その後、六月十二日には京都法観寺の釋運西堂を尋ね、仏祖正伝菩薩戒作法を伝授されています。釋運西堂は義尹禪師よりこの作法を伝授されておられますので、大智禪師と出家得度の師である義尹禪師が戒法において再び繋がったこととなります。

その二ヶ月後の八月十五日、瑩山禪師は永光寺において入寂されます。長い期間、日本を離れていた大智禪師は帰朝してすぐに

師と別れることになりました。より一層、瑩山禪師を仰がれて弁道される志気に満ちておられたであろう大智禪師の、その時の心情は如何なるものであったでしょうか。

その後は明峰禪師の指示で再び釋運西堂に就いて参禅され、更に研鑽を深められます。そして一旦肥後国に戻り、大慈寺瑞華庵で義尹禪師自筆の『永平開山御遺言記録』（道元禪師の遺言を永平寺三世徹通義介禪師がまとめたもの）を書写されています。

この頃から大智禪師は幽寂の地を求められていたようで、嘉歴二年（一三二七年）、加賀国河内荘（石川県白山市）に好適の地を得られて庵を結ばれます。また、大智禪師は加賀と肥後を頻繁に往来されていたようで、菊池氏第十二代当主・菊池武時（心空寂阿居士）が肥後国玉名郡（熊本県玉名市）の土地を大智禪師に寄進しております。この場所は後の紫陽山廣福寺です。

永光寺二世となられていた明峰禪師の元へ戻った大智禪師は首座を任じられ、元弘三年（一三三三年）正月十七日に至り、遂に嗣法を許されて道元禪師―懷奘禪師―義介禪師―瑩山禪師―明峰

禪師と五代相伝した伝衣を継承されます。この伝衣は現在も付囑

状と共に廣福寺に所蔵されており、やや青みを帯びた黒色の二十

五条袈裟で、由来は山城国の信者が道元禪師へ誠心誠意手織りし

た生地を進上し、これを道元禪師が自ら裁縫されたものだそうで

す。この時の大智禪師の感激は極めて大きかったと伝えられ、亡

き師翁、瑩山禪師に向けられた漢詩が『大智禪師偈頌』に三首ほ

ど収録されていますので一つを選びご紹介致します。

— 瑩山和尚に 上る —

六代の伝衣野僧に到る 千年踵を継ぐ嶺南の能

確春日久くして工夫熟す 祖室挑ぐるに堪えたり無尽の灯

この年、大智禪師は四十四歳になられていました。この頃、河

内荘の庵には雲水たちが大智禪師を慕って集まってきており、こ

こに一寺を建立し、獅子山祇陀寺を開創されました。大智禪師が祇

陀大智と称されるのもこの初開の寺号が由来となつています。祇

陀寺には六年ほど住し、後席を弟子に譲って肥後へ帰郷されます。

そして延元三年（一三三八年）、菊池武重（武時の嫡男）より肥後

国菊池郡穴郷班蛇口山に寺領を寄進され、ここに鳳儀山聖護寺を

開創されます。その時の寄進状が伝わっています。

『寄進し奉る心ざしは、大智上人深山禪寂の地に於いて仏祖の正法を商

量し給う宿願深重にまします間、武重清浄堅固の信心を発して当山の事

は尽未来際、大智上人に寄附し奉るところなり。但し後、住持職以下大小

公事の事、武重が子々孫々永くあい綺うべからず。開山上人附法正伝の

門弟、大法法灯を相続して、弥勒下生の晨にいたるまで断絶せしめざら

ん為なり、伏して願わくは仏祖加被護念し給いて、家門久しく昌え候て、

子孫貞心にして武略を天道に守りて永く本朝の鎮將たらん。仍つて忠を

朝家にいたして正法を護持し奉らん。』

当時は朝廷が南北に分かれて公武入り乱れ混迷を極めており、

その中、菊池氏は一貫して南朝方についていました。菊池氏は寺

領の寄進をただけの檀那ではなく、代々に亘つて大智禪師を尊

崇し、家臣を伴つて聖護寺に参籠していた様子が廣福寺に伝わっ

ている数々の起請文や寄進状から読み取れます。聖護寺さまに頂

いた冊子の縁起に菊池氏について書かれてありますので抜粋し紹

介致します。

『反乱策謀渦まぐ南北朝期、一族の存亡をも省みず、一切私利私欲ほんらんさくぼううすに走らず、南朝方の急先鋒として、終始一貫戦い抜いた菊池一族の不撓不屈ふとうふくつの精神は他に類を見ないので、まさに禅に培われたものといえる。大智禪師二十年の鳳山山居ほうざんざんきよの間、一族の諸將より寄せられた数々の「起請文」には、大智禪師に対する帰依尊崇の思いと、佛法護持紹隆の願いが込められている。』

大智禪師は在家信者に対して分かりやすく仏道の要点を説いた『仮名法語』や『十二時法語』を残しておられます。その内、十二時法語の冒頭部分を記します。

『仏祖の正伝は、ただ坐ざうにて候。坐ざう禪ともうすは、手をくみ足をくみ、身をもゆがめず、正しく持たもたせたまいて、心に何ごともおもうことなく、たとい仏法なりとも心にかげずして御座ござう候べし。それを仏にもこえたるとうし候なり。いわんや生死の流る転をや。この身を一たび諸仏の願海に捨てそうろうて後には、ただ諸仏の御ふるまいのごとくに行ぜさせたまそらい候いて、一たびわたくしに我わが

身みをかえりみることあるべからず（以下略）。』

正平二十一年（一二三六六年）十二月九日、肥前国高来郡（長崎県南島原市）の円通寺において、大智禪師は弟子の禅古和尚ぜんこに譲状を与えて後事を託し、その翌日に七十七歳で示寂されました。

大智禪師は祇陀寺・聖護寺・廣福寺以外にも、円通寺・兜率寺・聖寿寺など多くの寺院を開創されています。瑩山禪師門下の宗匠が地方での発展や教化に尽力されたことはよく知られていますが、大智禪師もその一翼を担っておられました。また、偈頌や法語に残されたように枯淡幽玄な生活の中で自然を愛され、只管打坐の正法を護持宣揚されました。その衆生済度の慈愛に満ちた接化の光明は、現在も世の中を照らし続けています。

— 大智禪師撰 鳳山山居（四） —

草屋単丁二十年（草屋単丁たること二十年）

未持一鉢望人煙（未だ一鉢いっぼつを持じして人煙じんえんを望のぞまず）

千林果熟携籃拾（千林せんりんの果熟かじゆくして籃かじを携たずさえて拾ひろう）

食罷溪辺枕石眠（食しょく罷おわつて溪辺けいへん石いしを枕まくらにして眠ねむる）